

## 書簡：能『ロミオとジュリエット』を観て

齋藤衛

SAITO Mamoru

先日はありがとう。素晴らしいものをみせていただきました。能の大御所、大部隊を巻き込んだ、あの大仕事をやりとおせたことに、敬服あるのみ。能の概念を破る、絢爛豪華な大芝居でした。「ロミオ」を、ロレンス神父を先頭に押し立てた平和への希求のドラマとされた趣旨、また能へのイントロの意味が分かったように思います。ロレンスのことは以前から考えていて、カトリックの神父と議論したことがあります。詳しいことは今は言えませんが。今は感謝のみ。

一つ補足。ロレンス神父を先頭に押し立てた平和主義解釈は、それはそれで正論ではあるが、個人として、一つの可能性として魅力を感じているのは、ド・ルージュモン『愛について：エロスとアガペ』(1972；訳 1993 平凡社)、における、『ロミオ』を「禁断の愛」、カタリ派に由来する宮廷恋愛の系譜の中に位置づけるもので、その解釈によれば、この悲劇は、禁じられるからこそ、ひたすら破滅に向かって裏の闇を突っ走る、自爆的悲劇になります。ロレンスは、すると、邪道の？共謀者になる（カトリック神父でも、ミルウォードのように、支持する神父と、あれでは教会の認める結婚に、本当にはならない、という神父がいる）そういう、両義性が、この劇に、そして、いつもシェイクスピアにはあって、難しくし、また、だからこそ長持ちがする。小生「シェイクスピア悲劇」は、みな、「問題劇」だとおもっています。・・・小生は今の若い世代の、政治、唯物派と、旧精神派（実はこれに近いが）の間に引き裂かれて苦しんでいます。それでも、あるいは、だからこそ、日本で、シェイクスピア批評の流れをつかんでいる・・・のは事実です。上の、別様の『ロミオ』解釈が、ありうることを指摘する人間がいることは、補遺でいいから添えておいて下さい。読者に考えてもらいたい。兎に角、あの大舞台を完成させた貴君の腕力には恐れ入った。金のことも、どうなのか心配になる。早々

(大阪大学名誉教授)